

2-5 施設・設備等

A群・大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性

学部全体

文学部では、青山キャンパスの校地、校舎、講義室・演習室・学生自習室、相模原キャンパスの校地、校舎、講義室・演習室・学生自習室を他学部と共用で使用している（「大学基礎データ」表36）。青山キャンパスには講義室61、演習室61、学生自習室5、相模原キャンパスには講義室115、演習室23、学生自習室5が配置されている（同上・表37）。

さらに、青山キャンパスでは、実験・実習室6、情報処理学習室9、語学学習室4を、経済・同第二部、経営・同第二部、法、国際政経の各学部と共用で使用しており、相模原キャンパスでは、心理学実験室6、科目実習室20を文学部単独で使用している他、スタンダード科目実験室10、視聴覚教室56、語学学習室16、情報処理学習室11、AVスタジオ5を、経済、経営、法、国際政治経済、理工の各学部と共用で使用している（同上・表38）。この他、青山キャンパスには、史学科考古学実習室16があ

る。

このように、**文学部の教育・研究において必要とされる施設・設備等は基本的に整備され、有効に利用されている**といえるが、社会の変化や教育方法の進歩に応じて、さらなる充実が図られるべきであることはいうまでもない。とりわけ、マルチ・メディアを利用した教育に関わる設備や、語学教育などに関わる視聴覚設備等は、技術の進歩にも即応しつつ、常に更新を図ってゆくべきであろう。具体的な問題点は、各学科に即して述べる。

教育学科

本学科が管理・使用している教室として、青山キャンパスでは、学科科目及び教職課程科目である理科教材研究、器楽、家庭科教材研究、図画工作等の授業で使用する実習室と教育方法や情報メディア関連の授業で使用する情報教育教室がある。一方、相模原キャンパスには、図画工作の授業で使用する実習室と器楽の授業で使用する練習室がある。

実習室や練習室においては、毎年度授業で使用する備品の更新を行う必要があり適宜対応している。とくに家庭科及び器楽関連の特別教室については教室が全体的に老朽化しているため全面的な改装について検討する必要がある。また、「保育内容」関連科目において、音楽や身体表現の活動に伴う授業において必要となる特別教室がなく、早急な新規の設置が必要となっている。加えて、情報教育教室の備品であるパーソナルコンピュータ、各種メディア機器、ソフトウェアは、更新期間が短く適宜更新の必要があり対応しているが、保守管理の人員及び予算の確実な裏づけがなく本学科の情報を担当している専任教員の個人的な努力によっている。

英米文学科

青山キャンパスでは2001年に現在の15号館が新設され、**英米文学科研究室、学科附属図書館、及び教員の個人研究室が同館の9階及び10階に移転することになり、従来よりも大幅に利便性が向上した。**また学科科目の授業の多くが15号館3～4階の演習室、及び5～6階の語学学習室（CALL教室）で行うことができるようになり、**学生が授業の前後に専任教員の個人研究室を訪れやすくなったことも教育的見地から大きなメリットであると考えられる。**

社会的要請の変化に対応した学習施設としては、相模原キャンパスに配置された**メディア・ライブラリー**、及び青山キャンパスの外国語ラボラトリー附属の**CALL教室**があり、英米文学科の英語科目及びコミュニケーション関連科目の授業に積極的に利用されている。

相模原キャンパスではI Eプログラムの各授業及び基礎演習など、25名前後の少人数で行う対話・討論型の授業が多く開設されているが、この目的にかなった規模・形態の教室が必ずしも十分に確保されているとはいいがたい。これは、相模原キャンパスにおける収容人数50名以下の教室の数と51名以上の教室の数が前期、後期を平均すると20対101と圧倒的に後者に偏っていることから明らかである（「大学基礎データ」表40）。

また、対話型の授業を行うためにはできるだけ対面式に机が配置された教室環境が望ましいが、教室の空き具合の関係で、座席が固定されているCALL教室に配置されたり、反対に、CALL教室を使いたいのにも普通教室に配置されるなどのケースが少なからずある。また、普通教室の多くに液晶プロジェクターが設置されているが、画面のサイズが小さいことや可視角度（範囲）の狭い旧式のモデルを導入しているために実用性が低く、教室によってはほとんど使い物にならないことがある。また、教室内に授業用のパソコンが常設されていないために、講師がその都度自分のパソコンを持参しなければならないなど何かと不便が多い。少なくとも各教室に1台は教師用のパソコンを設置したり、教室

の大きさに応じたプロジェクターを設置するなどの配慮が望まれる。

青山キャンパスではとくにCALL教室の少なさが大きな問題となってきた。青山キャンパスには現在4室のCALL教室が設置されているが、現時点ですでに1時限目を除く実質有効稼働率が65%前後になっており、2006年度からは新たに設置される科目の増加を考慮すると、70~80%を超える高い稼働率になることが予想されている。当面の対応策として、CALL教室の本来の目的に沿った語学クラスを優先するなどのルールを決め——あるいは既存のルールを再確認し——これを適切に運用することが必要となるが、いずれにせよ少なくともあと1~2室の増設が必要であると考えられる。また、授業用のほかに学生が随時利用できる自習室の確保も必要である。

なお、現在のCALL教室及びコンピュータ教室はもっぱら通常の授業用に設置されたもので、かつ学内のネットワークに組み込まれているために安全性を第一に考えられており、現状では文書作成やインターネット閲覧などの必要最小限の機能しか使えないようになっている。そのため、大学院レベルの授業や高度な研究用には使うことができない。したがって、英米文学科としては学科として高度な教育研究用に自由に利用することのできる小規模なCALL教室ないしコンピュータ教室（15~20席程度）の設置を強く求めている。06年度から新たに設置される「CALL教育方法論」や「コーパス研究方法論」などの授業を効果的に実施し、さらに大学院レベルでの研究を促進するためには是非とも必要な措置である。

フランス文学科

本学科では、社会的要請の変化に対応した学習施設として、相模原キャンパスに配置された「メディア・ライブラリー」や、青山キャンパスの外国語ラボラトリー附属のCALL教室を、「会話」、「エクспRESSION・オラル」、「コミュニケーション」等の授業に利用している。

青山キャンパスでは2001年に合同研究室、学科附属図書館、及び教員の個人研究室が15号館に移転したことで、この建物内で行われる授業については、資料とする辞書、図書等を附属図書館から運搬することがより容易になったといえる。

相模原キャンパスでは少人数の基礎ゼミ、また、青山キャンパスでは各専任教員が担当する「文学・語学・文化ゼミ（演習）」の授業があるが、この目的にかなった教室が両キャンパスとも十分に用意されていない。ゼミによっては参加者相互の主體的な質疑応答が可能になるよう、普通教室の机・椅子を授業の度に対面式に並べ替えている。当面、机・椅子をキャスター付きの動かし易いものに替えることでも状況が改善されるであろう（相模原キャンパスの一部にはそのような教室が既に存在しているが）。青山キャンパスでは学科附属の書庫に所蔵している辞書などの大型資料を提示する必要があると考えれば、書庫に隣接して演習室が確保されることが望ましい。

相模原キャンパスでは多くの語学の授業でテープレコーダー、CDプレーヤーを使用するが、現状ではこれらの機器が小教室に備えられていないため、教員が授業の度に講師控え室から運ぶ必要があり、教員の負担になっている。教室内に施錠のできる専用の棚を設置することが望まれる。

日本文学科

本学科では、学科合同研究室の問題（本章「II. 全学的な教育・研究への取組」の中の「8. 図書館及び図書・電子媒体等」の項目において述べた）を除き、施設・設備に関して、とくに学科として記述すべきことはない。強いていえば、映像や画像・音響などを利用する授業が年々増えているので、これらに関する設備のある教室をより一層充実させてゆく必要があること、また、日本文学科の特色である少人数の演習に利用できる教室を、今後も利用しやすい形で維持してゆく必要があることなど

であろう。

史学科

教室（講義室・演習室）のサイズと数は相模原キャンパスにおいては学生数に対して十分な水準に達している。一方青山キャンパスでは演習室や小規模教室は設備を含めて近年の拡充で満足すべき状態に近づいているものの、中～大教室が、とくに設備面を考慮に入れるならば明らかに不足しており、講義開始時以降に受講者数が理由で教室変更が必要となった場合などは、時間帯によっては設備面で非常に不備の大きい教室での開講を余儀なくされる点は改善が必要であろう。

また、情報処理室・情報処理学習室についても、相模原キャンパスの設備は十分な水準に達している。青山キャンパスの状況も近年著しく改善されたが、非常に人気が高くどの時間帯も使用されていて空きが僅かしかない点の改善も課題となろう。

心理学科

本学科は、学問の実証的、実験的性質から、実験室を保有している。相模原キャンパス0棟に6室（0214～0219室）（総面積157㎡）（「大学基礎データ」表38）、青山キャンパス総研ビルに4室（14401室、14402室、14405室、14409室）（総面積163.1㎡）、8号館に3室（総面積45.4㎡）を備え、一部はデータ解析も可能なパソコン室である。両キャンパスに文学部他学科と同様、合同研究室があり、学科の活動拠点となっている。

本学科では、臨床心理士指定大学院設置に伴い、従来の実験室を大学院付置心理相談室に改修し、転用した。このこと自体は社会的要請に応えるものであったが、従来の実験室であったところが大学院に移管したため、青山キャンパスの実験室が若干手狭になった。3年次「卒業研究Ⅰ」及び4年次「卒業研究Ⅱ」では、実験や観察、調査等を行ってデータを取ることが要求されるので、とりわけ夏期休暇以降に、実験室の予約が過密になっており、学生研究環境の確保という面で、学科としての努力が必要であろう。

本学科は、2001年度の発足以来、教育学科時代から受け継いだ学修のための種々の資源をいっそう活性化させようとしている。学修の活性化のために、まず重要なことは、学修環境の整備である。本学科では、心理学実験の充実のための実験機材の整備も欠かせない。

2001年の学科開設以来の実験機材を表にしてまとめると次のとおりである。

年度	機 材	設置キャンパス
2001	ハートレートアナライザーⅡ及び心拍メモリー式 重心動揺計EB1101・平衡機能計測ソフト一式 サーモトレーサTH3104MR一式 デジタル輝度計LS-100	相模原 青山 青山 青山
2002	アイマークレコーダEMR-NL8及び解析システム一式 撮影機材及び音声・映像編集一式 オーディオメータAA-77 普通騒音計NL-22	青山 青山 青山 青山
2003	ビデオ動作解析システムFrame-DIASⅡ	青山
2004	生体計測システム一式	相模原
2005	アイマークレコーダEMR-NL8及び解析システム一式	相模原

（心理学科研究室事務報告）

学科独立にともない、校舎に物理的な空間が確保されたことは学科にとって大きな前進であった。このテーマでの改善は、全学的な校地、校舎の改善計画に注意を払って、学科に必要なものを常に要請可能なよう準備することであろう。

なお、前回の『2002年度自己点検・評価報告書（青山学院大学の現状と課題）』で問題提起した「学科合同研究室の拡充」については、2004年9月から床面積を拡充して使用している。2004年の前期までは、75.71㎡であったが、隣接していた旧第14会議室（63.54㎡）を合わせ、139.25㎡になった。この拡充により、図書の配架、整理も進み、また、学生を交えたグループでの資料収集、討論なども円滑に実施できるようになった。